

日本の高校野球の歴史と文化

The history and culture of Japanese high school baseball championship

1K06B109

佐貫克宜

指導教員 主査 寒川恒夫先生

副査 リー・トンプソン先生

【序章】

日本において、野球部という組織は扱いが良いことが多いように感じる。特に、高校の野球部となると学生スポーツの中で最もメディアへの露出度が高いといえる。これは、自分自身が野球部に在籍して強く感じたこともある。その一方で、高校球児は高校三年間、しかも24時間365日、母校と郷土の期待を背負い規律正しい行動が課されており、さらにはただ勝てば良いというのではなく、「高校生らしく、正々堂々、はつらつ」とプレーすることが求められている。今聞けば「高校生らしさ」という言葉は非常に曖昧に感じるが、当時は何となくではあるものの高校球児としてあるべき姿を追い求めているように感じる。おそらく、幼いころからテレビを通じて高校野球に触れ、甲子園球場と甲子園球児に憧れを抱いていたことで、疑問を持つことがなかったのではないかと考えている。「なぜ高校野球は他の学生スポーツよりも特別な扱いを受けるのか」という疑問を抱き、卒業論文のテーマにすることにした。夏の選手権大会を主な材料として考察していくことで高校野球の文化を理解し、そこから今後の課題を探っていきたいと考えている。

【第一章 高校野球全国大会の始まり】

この章では、第一回全国中等学校（現在の高等学校）優勝野球大会以前に焦点を当てていく。第一回大会にて、副審判長の平岡寅之助が、「徳義を重んずる勇者の試合には必ず附随すべき礼儀なりと信じて制定せし次第なり。その他のすべての試合規則も現在あるところのものは元来米国のプロフェッショナルチームに適應せしむるがごとく作られたるものなれば、直ちにとって以て第一国情を異にし、競技場の設備を異にし、かつ試合の性質、ならびに技術を異にする我国の野球試合に適應するに不当なりと信じたるが故に…（以下略）」と述べているように、教育的意義が開催における大きな要因となった。

そのような結論に至った経緯を、大会以前の全国の旧制中学野球界の事情や、朝日新聞社が1911（明治44）年に紙面で展開した「野球害毒論」に触れることで明らかにしていきたいと考えている。

【第二章 朝日新聞の記事から見る高校野球界の変遷】

約90年にも及ぶ大会の歴史と変遷を、大きく戦前と戦後に分けることで変化を見つける。夏の選手権大会の主催である朝日新聞社の記事から、戦前と戦後、現在で異なる点はあるのか、また、時代ごとに高校球児たちに求められる「高校生らしさ」というものがどのように変化してきたかを考察する。なお、戦前は1915～1945年の30年間とし、戦後は下一桁が「0」の年（1950年、1960年～）に絞り記事を調べることにした。

【第三章 高校野球の文化】

1世紀にも及ぶ高校野球の歴史はあらゆる文化を生み、現在も守られているものが多く存在する。選手、監督はもちろん、彼らを取り巻く高校野球ファンや地元の人々も、それぞれに「高校野球観」を持ち、選手たちに強く求めている。この章では、高校野球の文化、選手と社会との関係について述べていきたいと考えている。

【第四章 高校野球とマス・メディア】

甲子園大会は、春・夏ともに全ての試合がテレビ中継され、翌日の紙面を賑わせている。今日の高校野球があるのにメディアの力が起因しているのは言うまでもない。夏の選手権大会の主催である朝日新聞社が、どのような目的から高校野球の全国大会を開催したのか、その意図を探っていく。

【結章】

論文全体のまとめを述べる。また、高校野球界の今後の課題について「選手」、「高校野球ファン」、「マス・メディア」のそれぞれの立場から考えていく。